山田みやこの活動報告

令和2年10月13日(火)

朝日地球会議2020(オンライン研修)
新しい未来のための５日間

主催　朝日新聞社

危機に負けない居場所づくり ～子ども食堂の実践から～

パネル討論
　湯浅 誠氏(全国子ども食堂支援センターむすびえ理事長)
　松島 洋子氏(愛媛県宇和島市でぐらんま子ども食堂を運営)

全国の子ども食堂　コロナ禍において開催率は地域差あり。

今、子ども食堂はボランティアが集まらない。
　フードパントリー(配布)には３～５倍の費用がかかる。
　長期化で疲れがたまっている。

そのような中で宇和島市で「ぐらんま子ども食堂」を再開した松島氏、その活動内容を話してくれた。

。コロナ禍でしたこと

　学校経由でひとり親家庭に「LINE@」登録、チラシ配布
　フードパントリー(配布) を105世帯へ

　ひとり親家庭の子どもに昼休みの１週間、毎日弁当配達
　を5世帯11人へ

　弁当や食料品が当たるウェブアンケート(ごちそうさまプロジェクト)を601世帯へ

※これらは「企業」や「むすびえ」からの現物提供や助成金で賄われている。

『子ども食堂は顔の見える関係の場所。困り事が喋れる場所、話すことで元気になれる』

〈湯浅氏から〉

　持続可能な開発は誰一人取り残さない世界の実現によって可能となる➡**SDGs**
　普段、地域の方と繋がりがあり皆さんどうぞという場所で平時の繋がりを作っておくことで、非常時(災害時・コロナ禍)のセーフティネットとなる。当たり前の日常がありがたいとコロナ禍の中で全国の方が体感した。
　課題別で動く組織ではなく平時、非常時で地域の賑わいづくりはそこからはじかれる。子どもを作らないことで可能になる。

「どんな時もつながり続けよう」
　新たな地域の繋がりを作り必要なものを取り込むことがSDGsの本質になる。

※平時からの繋がり、顔の見える関係の場所としての子ども食堂が増えていく事で、孤立する子どもたちを作らないことになる。コロナ禍の中でやり方は宇和島市の「ぐらんま子ども食堂」で実践していることも一つの方法である。知恵と工夫で前進していきたい。